ゲオルク・ビューヒナー『レンツ』の体験話法の日本語訳の可能性

神田和恵

はじめに

＊文中，保坂(1977)，ロンカドール(1988)などの記述は，「1977年刊の保坂氏の論文」，「1988年刊のロンカドール氏の論文」を意味する。

本論は，1997年日本独文学会東海支部発行の『ドイツ文学研究』29号に掲載されたドイツ語での拙論 „Die Erlebte Rede in Georg Büchners ‚Lenz'" (以下ERBL) に内容的に続くものである。ERBLでは，ゲオルク・ビューヒナーの『レンツ』の体験話法についての先人の研究を検討し，[注1] 新たに『レンツ』の体験話法部分の認定を試みた。本論では，ERBLで認定した体験話法の部分テキストの日本語訳の可能性を探る。

その手順としては，

1）先行論文によく引用される『レンツ』の冒頭のペルゾナール (personal) な語り[注2]の部分を既存の4つの訳について，主人公を表す三人称の代名詞に注目しつつ比較する。

2）日本語の体験話法と体験話法の日本語訳について研究した保坂 (1977)，英語の自由間接話法の日本語訳について研究した中川(1983) および，日・英語を比較対照した牧野の『くりかえしの文法』(1980)，ロンカドール (1988) のロゴフォリック研究などに学びつつ，『レンツ』の体験話法部分の日本語訳の様々な可能性を考察する。[注3]

1．使用テキストについて

ゲオルク・ビューヒナーの唯一の短編『レンツ』は，作者の死後2年たった1839年にカール・グツコーによって『テレグラーフ・フュア・ドイッチュラント』[注4]に発表された。それは，ビューヒナーの許嫁であったヴィルヘルミーネ・イェーグレ（ミンナ）による清書をもとにしたものであった。また，ビューヒナーの弟ルートヴィッヒ・ビューヒナーによって刊行された1850年版の『ゲオルク・ビューヒナー遺稿集』[注5]の中の『レンツ』も，ビューヒナー自身の草稿そのままではなく，ルートヴィヒが自分の考えによって手を加えている。[注6]

ビューヒナー自身の遺稿が既に失われている現在，『レンツ』のテクスト・クリティークには決定的な証拠が欠けていると言わざるを得ないが，ドイツにおいてはゲオルク・ビューヒナー協会及びマールブルク大学のゲオルク・ビューヒナー研究所を中心とした，いわゆる実証派（Positivismus）の研究をもとに，1984年フーベルト・ゲルシュ編レクラム版の Georg Büchner „Lenz“ Studien Ausgabe が出版され，1998年ブルクハルト・デードナー編ズーアカムプ版 Georg Büchner „Lenz“ Text und Kommentar がそれに続いている。[注7]ここで詳述する余裕はないが，実証派の研究は，ビューヒナーの作品には必ず典拠（Quelle）があることに注目し，その典拠を徹底的に洗い出そうという立場をとっている。既に作者自身の草稿が失われている『レンツ』についても，典拠研究（Quellenforschung）の方法により，ベルゲマン初版[注8]を基本において実証派自身のテクストを再構築し，従来最も尊重されてきたレーマンの版[注9]に対置している。[注10]

本論の筆者は，実証派の研究に基づいて1999年から刊行される予定のマールブルク版『ゲオルク・ビューヒナー全集』（Marburger Ausgabe = MBA）の動向や，ビューヒナー協会，ビューヒナー研究所の研究などには今後も注目し，研究していくつもりであるが，本論の基礎になった『レンツ』の体験話法研究に際しては，レーマン版を使用した。なお，筆者の考える体験話法と体験的印象[注11]の部分に関する限り，レーマン版とベルゲマン版やレクラム版，ズーアカムプ版に差違はない。

2.『レンツ』の体験話法

『レンツ』のどの部分をどのような理由によって体験話法や体験的印象と認定するかについては，ERBL に既に述べた。ここでは筆者の認定した体験話法の部分テキストのみを，『レンツ』テキストの中での順序に従って，まずドイツ語で挙げておく。本来は十分に前後のコンテキストをとって例を挙げるべきであるが，ERBL との重複を最小限に抑えるため，割愛する。

① …… er war allein, ganz allein, …… [HA 80][(注12)]

② …… er war im Leeren, …… [HA 80]

③ Kinder am Tische, alte Weiber, Mädchen, Alles ruhige, stille Gesichter, …… [HA 80]

④ …… er war weg, weit weg. [HA 81]

⑤ …… aber umsonst, Alles finster, nichts, er war sich selbst ein Traum, …… [HA 81]

⑥ …… aber kalt, kalt. [HA 83]

⑦ …… dieser Glaube, dieser ewige Himmel im Leben, dies Seyn in Gott; …… [HA 83]

⑧ Wie den Leuten die Natur so nah trat, alles in himmlischen Mysterien; aber nicht gewaltsam majestätisch, sondern noch vertraut! [HA 83]

⑨ Er war allein, allein! [HA 85]

⑩ …… und jetzt so todt. [HA 93]

⑪ …… aber todt, todt! [HA 93]

⑫ …… diese Züge, diese stille Gesicht sollte verwesen, …… [HA 93]

⑬ …… er hatte keinen Haß, keine Liebe, keine Hoffnung, eine schreckliche Leere (und doch eine folternde Unruhe, sie auszufüllen.) Er hatte Nichts. [HA 98]

⑭ …… die Natur, Menschen, (nur Oberlin ausgenommen,) Alles traumartig, kalt …… [HA 98]

上記①から⑭までを認定するにあたっての判断基準は次の諸点である。[注13]

- 語り手が介在したコンテキストであること。
- 思考再現か発話再現（体験話法），または人物（この場合はレンツ）の認知（Wahrnehmung）（体験的印象）であること。
- 体験話法と判断される箇所の前後に，sagen, denken などの伝達動詞やその他のシグナルがあり，かつ伝達動詞から解放された独立文であること。
- 「二重の声」（dual voice）が聞こえてくること。[注14] 特に『レンツ』の場合は，アンデレック（1970），パスカル（1977, 1978）[注15] などが指摘するように，レンツの言葉が語り手のパートである地の文の中に頻繁に現れるので，二つの声の重なり合うところを体験話法，人物自身の認知と特定できるところを体験的印象と認定し，二つの声が交互に混じり合うだけのところは，ペルゾナールな語りではありレンツのパースペクティブ[注16]ではあっても，体験話法と認定すべきでないと判断した。

3．『レンツ』の既存の日本語訳

『レンツ』には，次の4つの日本語訳がある。

A．青木重孝訳：『レンツ短篇』「ゲオルク・ビューヒネル作品集 ダントンの死　外四篇」所収　東京．白水社．1941.

B．手塚富雄訳：『狂ってゆくレンツ』「世界短編文学全集3 ドイツ文学19世紀」手塚富雄編　東京．集英社．1963.

手塚富雄訳：『狂ってゆくレンツ』「現代の世界文学　ドイツ短編24」東京．集英社．1971.（1963年版の再録）

C．手塚富雄訳：『狂ってゆくレンツ』「ゲオルク・ビューヒナー全集全一巻」手塚富雄，千田是也，岩淵達治監修　東京．河出書房新社．1970.（改訳）

D．飯吉光夫訳：『レンツ』「中央公論文芸特集1990年秋季号」東京．中央公論

社. 1990. p.96-116.

日本におけるビューヒナー作品の翻訳は，早くも太平洋戦争中の1941年に青木重孝によって行われている。これは，レーマン版の刊行から遡ること約20年前ということになり，ベルゲマン版による翻訳であることがわかる。ベルゲマン版も何回かの改訂を行っているが，体験話法部分に関しては，これもまた幸いにして諸版に差違がないので，訳の比較の場合も，どの版によったかに大きな注意を払わなくてもよいことになる。

日本語訳の検討にあたっては，1970年の手塚富雄改訳を基本におき，適宜青木訳，飯吉訳を比較検討する。

4．レンツのパースペクティブからの語りの日本語訳の問題

初めに，パスカル(1977, 1978) やシュタンツェル (1979) など，物語論や体験話法研究の中で頻繁にとりあげられてきた『レンツ』冒頭部分の訳を取り上げ，『レンツ』のペルゾナールなテクストの訳の可能性について考える。

<『レンツ』冒頭45行の手塚富雄訳>

1）一月二〇日にレンツは山を越えた。2）雪におおわれた峰々と，斜面，谷に続く灰色の岩石，緑の平地，岩壁，モミの森。

3）じめじめと寒かった。4）水がちょろちょろと岩を流れ落ち，道を横切る。5）モミの木の大枝がしめっぽい空気の中に重く垂れさがり，6）空には灰色の雲が流れていた。すべてがひどく重々しかった。――と，霧がのぼってきて，重くしめっぽく灌木の中をはいまわった。ひどくもの憂げに，ひどく緩慢に。7）〈彼〉は無関心に先へ進んでいった。道々のことなど，[@] どうでもよかった。道は上ったり下ったりした。8）[-] 疲れはまるで感じなかった。ただ [-] 逆立ちして歩けないのが，[@] 時どき不愉快だった。9）はじめのうちは，岩石が落ちてきたり，灰色の森が [@] 下の方で揺れたり，霧がさまざまなものの形を呑みこんだかと思うまもなくまたその巨大な姿をなかば露わにしたりすると，(彼)

の胸は圧迫された。10）［@］胸が苦しくなってきて，失われた夢を求めるように［–］何かを求めたが，［–］何も見つかりはしなかった。11）［@］すべてがひどく小さく，ひどく近く，ひどく濡れているように［@］思われた。12）［–］この大地を暖炉のうしろにでも片づけてしまいたかった。13）［–］山道を一つおりて，離れた一つの地点に達するのに，こうも時間がかかることが，［–］納得いかなかった。14）［–］その全部がたった二，三歩でまたげるような気が［–］したのだ。15）しかし，時おり，嵐が雲の塊を谷々へ投げこみ，それが森をのぼってゆく。すると幾千の声が山中に湧きおこり，遠くに去ってゆく雷鳴のようにひびくかと思うと，次には荒々しい歓呼をあげて大地を讃えるように，烈しく近づいてくる。同時に雲が，いななく野生の馬のように［heran］疾駆し，日光がそのあいだから射してきて，きらめく刃を雪の斜面に突きさす。すると明るいまぶしい光が尾根を越えて谷に射しこんでくる。16）また時には，嵐が雲を下の方へ追いやって，頭の上に淡青色の湖のような空をぽっかりと覗かせたりする。そのとき風は鳴りやんで，はるか下の峡谷やモミの木立から，子守歌や鐘の音のような音が聞こえてくる。そして紺碧の空にはうすい赤みが［hinauf］さし，雲のきれが小さな銀色の翼をつけてわたってゆく。すると鋭くきついすべての山頂が，荒野に高くそばだってきらめき出すのだ――そういう変化のときには（彼）の胸は引き裂かれた。17）〈彼〉はあえぎながら，体を前にかがめ，目と口を大きく開けて立った。［–］嵐を吸いこみ，すべてを［自分］の中にとり入れなければならないと［–］思った。［–］体をぐっと伸ばして，大地におおいかぶさった。〈彼〉は宇宙の中へえぐりこんだ，それは［@］苦痛を与える快感だった。18）あるいは［–］じっと立って頭を苔の中にうずめ，目をなかば閉じた，するとすべては（彼）から遠のいてゆき，大地も（彼）の足を離れていった。それは遊星のように小さくなって，はるか［@］下を美しく流れている奔流に呑まれていった。19）しかしそれも瞬間のことだった。〈彼〉はやがて冷静に，しっかりと落ちついて身を起こした。影絵が（彼）の前を通り過ぎていったように――。20）［–］もう何も覚えてはいなかった。

［手塚訳：全集　p. 219f.］

＊下線部は指示詞（hinein, herab, heran など）の訳。訳で表現されていないと

ころは原文から語を補っておいた。

＊原文で er があるが訳で「彼……」と訳していないところは［-］，ihm があるが「彼……」と訳していないところは［@］の符号を補っておいた。

＊訳語「彼」で，er を訳したものには〈　〉をつけ，ihm を訳したものには（　）をつけた。

上の引用部分は，原文では，1〉行為動詞を定動詞としてレンツの行為を外側から描写する文や，2〉伝達動詞（sagen, denken など）を定動詞としてレンツの内面を直接話法か間接話法で表現する文を除いて，ほとんどがペルゾナールな語り，つまり，体験話法はなくても，レンツのパースペクティブからの語りの部分である。(注17) この部分の訳を検討することで，ペルゾナールな語りの部分の訳の問題をまず考えていく。

引用部分の原文には，レンツを表す三人称の名詞，代名詞は，次の数だけある。

Lenz: 1 / er: 18　/ ihm: 12（前置詞 + ihm: 7, es + 動詞 + ihm: 5）

そして，これらをどう訳したかまとめたのが次である。

Lenz	→	レンツ	: 1
er	→	彼	: 4
	→	ゼロ代名詞	: 14
ihm	→	彼	: 4
	→	ゼロ代名詞	: 8

そのうち「レンツ」と訳しているのは，冒頭の次の文で，これは語り手のアウクトリアール（auktorial）(注18) な語り出しで主人公を名指しているのであるから，当然である。しかもこれは，行為動詞を含む1〉の例でもある。

1）Den 20. (Januar) <u>ging</u> Lenz durch's Gebirg. [HA 79]

一月二〇日にレンツは山を越えた。　　［手塚訳：全集　p. 219.］

次に，合わせて30あるerまたはihmが「彼」と訳されているのは，手塚訳では8例であることがわかった。青木訳，飯吉訳と比較してみると，「彼」の数は次のようであった。

代名詞		訳	数	計
青木訳：er	→	彼：	13	
ihm	→	彼：	6	19
手塚訳：er	→	彼：	4	
ihm	→	彼：	4	8
飯吉訳：er	→	彼：	6	
ihm	→	彼：	2	8

以上の数字から，青木訳は「彼」を省略せずに訳していることが多く，手塚訳，飯吉訳はゼロ代名詞にしていることが多いのがわかる。

次に手塚訳のみに限って，どの文のerまたはihmを「彼」と訳しているのかを，具体的に取り出してみる。

7）Er ging gleichgültig weiter. [……] [HA 79]
彼は無関心に先へ進んでいった。　　［手塚訳：全集　p. 219.］

9）Anfangs drängte es ihm in der Brust, wenn [……] [HA 79]
はじめのうちは，……彼の胸は圧迫された。　　［手塚訳：全集　p. 219.］

この2例は，いずれも大文字で始まっているが，これは，手塚訳の1963年版がベルゲマン版をもとにしており，その段落替えの初めなのである。この後は，引用部分中に段落替えをしたところはなく，引用の終わりのer wußte von nichts mehr. の後で替わるのみである。以上のことから，7），9）の「彼」は，レンツの行動なり心中なりを，段落を替えてもう一度語り手の立場からとらえ返した

ものとも解釈できる。

16）[……] riβ es ihm in der Brust [HA 79]

……彼の胸は引き裂かれた。　[手塚訳：全集　p. 219]

16）は，長大な wenn ――und dann[(注19)]型の構文の後でやっと代名詞が出て来るところなので，やはり改めて「彼」と語り手の立場から明示したいところであろう。

17）[……] er stand, keuchend, den Leib vorwärts gebogen, Augen und Mund weit offen, er meinte, er müsse den Sturm in sich ziehen, Alles in sich fassen, er dehnte sich aus und lag über der Erde, er wühlte sich in das All hinein, es war eine Lust, die ihm wehe that [……] [HA 79f.]

彼はあえぎながら，体を前にかがめ，目と口を大きく開けて立った。[–] 嵐を吸いこみ，すべてを自分の中にとり入れなければならないと[–] 思った。[–] 体をぐっと伸ばして，大地におおいかぶさった。彼は宇宙の中へえぐりこんだ，それは[–] 苦痛を与える快感だった。

[手塚訳：全集　p. 219f.]

17）は，はじめレンツの行為を語り手が描写しているのだが，er meinte, er müsse [……] という，伝達動詞に導かれた間接話法を契機として，徐々にレンツの内面の空想の世界に入っていく例である。下線部は定動詞として使われた行為動詞，あるいは伝達動詞だが，er dehnte sich aus のところからは，現実のレンツの行為を描写しているのではない。レンツの空想の世界での行為を描いている。従って，次のような訳の方がわかりやすいかもしれない。

17)' [–] 大きく伸び広がって大地から浮き，地球をおおうのだ。宇宙の中にもぐりこむのだ。それは苦しいほどの欲求だった。　[神田試訳]

神田試訳に文末表現「のだ」を取り入れたのは，後述の保坂宗重（1977）の日本語の体験話法の特徴[注20]をペルゾナールな語りの訳に援用することで，日本語としても，語りの「作中人物化[注21]」を追求してみたものである。

18) oder er stand still und legte das Haupt in's Moos und schloβ die Augen halb, und dann zog es weit von ihm, die Erde wich unter ihm, sie wurde klein wie ein wandelnder Stern und tauchte sich in einen brausenden Strom, der seine klare Fluth unter ihm zog. [HA 80]

あるいは［–］じっと立って頭を苔の中にうずめ，目をなかば閉じた，するとすべては（彼）から遠のいてゆき，大地も（彼）の足を離れていった。それは遊星のように 小さくなって，はるか［@］下を美しく流れている奔流に呑まれていった。［手塚訳：全集 p. 220.］

18）はやはり行為動詞でレンツの行為を外側から描き始めているが，und dann 以降はまた想像の世界である。その中には wie に導かれた直喩 wie ein wandelnder Stern もあり，空想の世界であることが示されるが，直喩以外のところは，現実と空想あるいは妄想とが渾然一体となってしまっている。美しい奔流は確かに下を流れているだろうが，大地が彼の足を離れていくことは現実にはありえない。さて，この18）の中の er はゼロ代名詞，3つの，前置詞 + ihm のうち2つは（彼），1つはゼロ代名詞に訳されている。その訳し分けの基準はこれ以前の例よりあいまいである。

以上見たように，手塚訳では，18）にあいまいさが残るほかは，引用部分をできるだけ「彼」を使わずに訳している。筆者の知る限りでの最古の日本語訳である，青木訳との数的比較でも，そのことは言える。飯吉訳にも「彼」の使用は少なく，特に，ihm に対しては，次の2例だけである。

9）Anfangs drängte es ihm in der Brust［……］［HA 79］
はじめのうち，…… 彼の胸はたまらなくなった。［飯吉訳 p. 96］

これには手塚訳の影響が認められるように思う。ihm のあとの in der Brust との関係で，「彼の」と訳すのが自然だということも言える。しかし，ここを次のようにすれば，「彼の」をとってしまうことも不可能ではない。

はじめのうちは，……胸に迫ってきた。(胸がたまらなくなった。)

［神田試訳］

つまり，「胸は」とレンツの胸を主題化したから「彼の」が必要になったのであって，ここで特にレンツの胸を主題化する必要がないならば，この「彼」も省くことが可能である。

もうひとつの例は，18) で，手塚訳が「彼」と訳さなかった次の ihm である。

18) oder er stand still und legte das Haupt in's Moos und schloβ die Augen halb, und dann zog es weit von ihm, die Erde wich unter ihm, sie wurde klein wie ein wandelnder Stern und tauchte sich in einen brausenden Strom, der seine klare Fluth unter ihm zog. [HA 80]

あるいは［–］じっと苔に頭を埋めていた。眼をなかば閉じていると，［–］遠くから 引く力があって，［–］からだの下から大地がするすると遠ざかって行った。大地は遊星のように小さくなって，(彼) のからだの下を清らかな早瀬のように流れ下っている，たぎる流れの中に身を没していった。

［飯吉訳　p. 97］

ところで，飯吉訳が［彼］と訳したこの ihm は，果して本当にレンツを指すのだろうか。3 人の訳者の解釈に従ってレンツを指すととっておいたが，実は，Stern や Strom を指す可能性も否定できないのではないか。後者のように解釈すれば，「宇宙の中へもぐりこんだ」レンツの空想の世界としての一貫性が得られる。しかし，前置詞 + ihm (von ihm, unter ihm, unter ihm) の 3 つめという，この狭いコンテキストの中での結束性(注22)の問題も無視できない。いずれにしても，

このihmを「彼」と訳さなければならない必然性がないとだけは言えるように思う。以上のように見てくると，必ず「彼」と訳すべき，レンツを指す三人称代名詞が，大変限られてくることがわかる。日本語では，主語が読者や聴き手にはっきりしているときには，いちいち断らない，つまりゼロ代名詞化するという特徴がある。同じ代名詞を何度繰り返そうと，主語なしには人物を主体とする平叙文は成り立たないドイツ語や英語とは，大きく異なるのが，日本語のこの点である。

さて，日本語のこの点にもふれながら，日本語の体験話法について考察した文献がいくつかあるが，まず，保坂(1977)と中川(1983)を参照してみた。この2つを読み比べてみると，日本語の体験話法のとらえ方にも揺れのあること，今後も多くの実例を集め，検討する必要のあることが感じられる。

保坂宗重：『テキスト理論による文章の分析——日本語の体験話法について——』(1977)は，『源氏物語』や新聞記事，井伏鱒二の『本日休診』，石川達三の『自分の穴の中で』を具体例として，日本語の体験話法をテキスト理論の立場から解明し，現代日本語の体験話法の文法形態をも見極めようとしたものである。それによると，日本語の体験話法は次のような特徴を持つとまとめられている。

＜日本語の体験話法の特徴＞

部分テキストの外

「だれがだれに言った」「だれが考えた」という伝達動詞が原則として省略されている。

部分テキストの前後

引用かっこ，引用符を欠いている。

部分テキストの内部

- 無主語文か三人称主語文である。
- 自己中心語（ここ，そこ，あそこ，この，その，あの）をもつ。
- 会話体・思考表現としての文末表現を保持している。

助動詞（です，ます，だろう——）

終助詞（か，さ，せ，な，よ，ね，のだ——）

文末符号（？！）(注23)

一方，中川ゆきこ『自由間接話法』(1983) は，ヴァージニア・ウルフ『燈台へ』の日本語訳，石川達三『四十八歳の抵抗』『ひとりきりの世界』，津島佑子『寵児』，伊藤整『発掘』，渡辺淳一『神々の夕映え』などを具体例として，日本語の自由間接話法について考察している。保坂 (1977) のような形でのまとめはなく，具体例に沿って，問題点を指摘していく記述となっているので，その中で注目されるいくつかの点をピック・アップしてみる。

- 自由間接話法を日本語訳するには，「直接話法におきかえて，意識や発話の主体である主人公をさす三人称代名詞は一人称にもどし，動詞の過去形は現在形にもどしてみて訳すのが順当だ」という考え方の紹介。(注24)
- 石川達三が，自由間接話法の「『二重性』を意識したときの日本語の表現が「彼」となり，「…… だった」となった」ことの紹介。(注25)
- 石川達三によって「自分」「自分自身」がよく用いられることの指摘。それが「彼」「彼自身」と交代可能であることの指摘。(注26)
- 自由間接話法の he の訳語として，「彼」をいたずらにさけるより，おおいに利用すべきではないかとの提起。(注27)
- 「た」「だった」が自由間接話法の過去形の訳として，(中略) 直接話法型の訳よりは，原文のニュアンスを伝えるのにはるかに適している場合が多いのではないかとの意見。(注28)

中川氏は，結論的には自由間接話法は直接話法型の訳にするのが原則のようだとしつつも(注29)，次のように述べる。

> しかし伝達句をどのようにするのかとか，語句と構文の間接化のしかたには多様性がある。それらは直接型のものでも，完全な直接話法のような，口語のリアリスティックな再現ではなくて，その調子を感じさせる程度にとどめているだけである。修正直接話法と一般直接話法の混合タイプとでもいうべきものである。それでこそ直接話法と対立的にもちいられる意味もあるわけで，自由間接話法の日本語訳にあたっては十分留意すべき点である。(注30)

中川氏が，自由間接話法を機能上，直接話法に還元できないと考えているのがよくわかる。つまり，日本語訳においても，できるだけ，一般の直接話法とは異なる，中間的な話法を模索すべきだというのである。すぐ後に続く次の記述にも注目される。

> もちろん日本語に訳すときには一般論は禁物である。なによりも，まず，ひとつひとつの作品のなかでそれがどのように機能しているのかを考えてみなければならないだろう。原作の意図をいかすのがもっとも重要なことである。(注31)

以上のような中から何を『レンツ』の日本語訳の可能性として取り入れるか，それだけでも一論を展開すべき意味がある。しかも，どちらの文献も，日本語の体験話法についての研究ではあるが，地の文型の「作中人物化」された語りの多い『レンツ』のような例の日本語訳についての研究ではない。しかし，日本語の体験話法や，体験話法の日本語訳における，代名詞や文末表現の工夫を，『レンツ』のペルゾナールだが体験話法ではない語りにも，思い切って適用して考えてみようと思うのである。それは，手塚訳にはゼロ代名詞化が顕著に見られること，表現の意識的操作によっては，それさえもっと徹底して，三人称の代名詞を段落替えの最初 Er ging gleichgültig weiter. にだけ適用することも可能であること，の二点を考えてのことである。

保坂／鈴木（1993）や中川（1983）にも指摘のあるとおり，(注32) ゼロ代名詞は日本語の日常会話や物語の中ではごくあたりまえな現象であるが，牧野成一『くりかえしの文法』（1980）は，ゼロ代名詞が，「自分」に次いで「共感」の標識となっていることを指摘している。(注33) ペルゾナールな語りの中の作中人物を表すのに，語り手の共感をこめることのできるゼロ代名詞が，やはり有効なのではないか。

この見方に立てば，『レンツ』の日本語訳で，「彼」を多用している青木訳は，テキストをかなりアウクトリアールと見ている（自覚の有無にかかわらず）ことになり，手塚訳と飯吉訳は，比較的ペルゾナールと見ていることになる。特に，青木訳を先例として知っていたはずの手塚氏が，大幅に「彼」を削ったことには，

それなりの意味があったはずであろう。

保坂(1977)，中川(1983)，牧野(1980)が共通に指摘しているゼロ代名詞化が，レンツのパースペクティブからの語りを日本語訳するのに，有効なひとつの手がかりとなっていると考える。

登場人物のパースペクティブを支えるのに有効なもうひとつの代名詞「自分」(ロゴフォリック)[注34]がある。牧野(1980)は，「代名詞による共感ハイアラーキー」を次のように提案している。

再帰代名詞（自分）＞ ゼロ代名詞 ＞ 非ゼロ代名詞[注35]

しかし，『レンツ』引用部分の手塚訳では，「自分」は，sich に対する訳語として一度出てくるだけである。er や ihm を「自分」と訳したのでは，語り手のレンツに対する共感度が高すぎるのであろう。

5．『レンツ』の体験話法の日本語訳の問題

『レンツ』の体験話法の日本語訳についても，本稿では主に作中人物を指す代名詞に注目し，3つの訳を比較検討していくことにする。また，文末表現「のだ」の使用にも着目したい。

ここでは，体験話法部分の訳に限って比較する。また便宜上，青木訳はA，手塚改訳はC，飯吉訳はDの符号で表すことにする。また，神田試訳をKとし，3つの訳以外の可能性を示してみることに重点をおいた。可能性があまりないと判断したときにはKは省くことにする。下線はすべて筆者による。

① er war allein, ganz allein　[HA 80]

A：彼は獨りだった，全く獨りだった。　[p. 159]

C：ひとり，まったくひとりの彼だ。　[p. 220]

D：ひとりぼっちだった。まったくひとりぼっちだった。　[p. 97]

K：自分はひとりぼっちだ。まったくひとりぼっちなのだ。

下線部を比べてみていただきたい。A，Cは「彼」を使い，Aは過去形の文末，Cは現在形の文末を採用している。Dはゼロ代名詞と過去形，Kは「自分」と現在形である。これらを牧野(1980)にならい共感のハイアラーキーで示すと，次のようになる。

K ＞ D ＞ C ＞ A

Aは，語り手のパースペクティブの方が強い訳である。

② er war im Leeren [HA 80]

A：彼は空虚の中にゐた。 [p. 159]

C：おれは空虚の中にいる！ [p. 220]

D：[–] 何もないがらんどうの所にいるのだった。 [p. 97]

K：[–] なんという空しさだ！

Aは①同様，語り手のパースペクティブの強い訳である。Cに「おれ」が使用されているのが注目される。自由直接話法型の訳である。(注36) Kも自由直接話法型に近いが，ゼロ代名詞化によってやや中間性を出したつもりである。Dは語り手のパースペクティブとレンツのパースペクティブの重なりあいに成功しているように思える。しかし過去形の文末により，やや語り手よりになりすぎているかもしれない。

共感ハイアラーキー：C ＞ K ＞ D ＞ A

③ Kinder am Tische, alte Weiber, Mädchen, Alles ruhige, stille Gesichter [……] [HA 80]

A：机に向かってゐる子供たち，老婆，少女，何れも安らかな静かな顔だった。 [p. 160]

C：食卓についている子供たち，年とった女たち，少女たち，みんな安らかで静かな顔だった。 [p. 220]

D：食卓についている子どもたち，老婆，少女，どれも落着いて静かな顔だった。 [p. 98]

K：食卓についている子どもたち，年とった女たち，少女たち，みんな安らかで静かな顔だ。

Aの「机」は論外としても，どの訳も大差はない。ただ，例③をレンツの認知ととるならば，文末は現在形の方がよい。

④　er war weg, weit weg.　[HA 81]
A：彼は我を忘れた，遠く我を忘れた。　[p. 161]
C：彼はわれを忘れた，すっかりわれを忘れた。　[p. 221]
D：彼は遠くにいた，はるか遠くにいた！　[p. 98]

レンツの内面描写であるとは言っても，この部分は，自我の感覚を失っているレンツの内面を表現しているのであって，思考再現として言語化することさえ不可能なほどの，意識下の意識に埋没しているレンツなのであるから，直接話法型の訳はできない。「おれは我を忘れた」とか，「自分は我を忘れた」とか訳せば，回想になってしまう。しかし，ここは回想ではないのだから，レンツの意識を描きながらも，レンツを一人称化して訳すことは無理なのである。語り手寄りの体験話法として，代名詞は「彼」を使うべきところであろう。

⑤　aber umsonst, Alles finster, nichts, er war sich selbst ein Traum
[HA 81]
A：然しむだだった，すべては暗く，何もなかった――彼は自分自身一つの夢だった。　[p. 161]
C：だが駄目だった，すべては闇で，無だ――彼自身が一つの夢だった。
[p. 221]
D：でも，だめだった。何もかもが闇で，無だった。[-] 自分までもが一つの夢のようだった。　[p. 98]
K：だがむだだ。すべては闇だ，無だ，自分自身でさえ夢なのだ。

Cが現在形の文末を一か所だけ使っているほかは，A，C，Dともに過去形で，語り手のパートを捨てていない。代名詞はDが「自分」を用いているほかは，「彼」と客観化されていて，一貫して語り手のパートとして訳しているAに対し，C，Dは基準があいまいである。Kは直接話法型であるが，地の文とのつなぎめを語り手寄りに，あるいは，慨嘆に入る前の内省を表すように訳してみた。ここを「ああ，だめだ。」などのように訳せば，内的モノローグを表す自由直接話法となるが，思考再現の訳としては徹底する。思考再現というのさえ不適当な，レンツの切迫した意識の表現としては，Kでも満足というわけにはいかない。

⑥ aber kalt, kalt. [HA 83]
A：然し――冷たい，冷たい！ [p. 164]
C：だが，どれも冷たい，冷たい。 [p. 222]
D：しかし――冷たかった。冷たかった。 [p. 100]
K：なんと冷たい，冷たいことか！

Dのみが，過去形で訳している。他の例の訳を見ても，Dは現在形の文末を選んでいないのが特徴である。Aが現在形を選んでいるのはむしろ例外的で，原文の動詞欠如が影響していると見られる。Kは共感ハイアラーキーを高め，冒頭の感嘆詞と感嘆の文末表現「か」によって，レンツの恐怖心を表してみた。aberは強調であろう。

次は⑦と⑧を一緒にあつかう。訳のかっこは筆者。

⑦ dieser Glaube, dieser ewige Himmel im Leben, dies Seyn in Gott; jetzt erst ging ihm die heilige Schrift auf. ⑧ Wie den Leuten die Natur so nah trat, alles in himmlischen Mysterien; aber nicht gewaltsam majestätisch, sondern noch vertraut! [HA 83]

A：何たる信仰であらう，人生に於けるこの永遠の天國，神の中のこの存在――（今や漸く彼に聖書が解ってきた。）かうした人々に自然はいかに眞近く現はれたことであらう，すべて天上の神秘に包まれて，しかも恐

ろしく厳然とではなく，むしろもっと親しげに！　[p. 165]

C：この信仰，生活の中のこの永遠の神の国，神の中にこのように住むこと――（聖書の世界がいまはじめて彼に開けてきた。）こうした人びとに自然はどんなに身近かなことだろう，すべては神々しい神秘に包まれて。けれど，恐ろしくいかめしいふうにではなく，ずっと親しみぶかく！

[p. 223]

D：このような信仰，現世におけるこのような永遠の天国，このような神の中での存在，（つまりそのような新約聖書の世界がいまはじめてレンツのうちに開けてきたのだった。）この地の人びとには自然が何と身近に感じられていることだろう。すべてが天国的な神秘につつまれている。しかし，決して厳めしい力によってではなく，もっと親密に！

[p. 100]

Aで1か所過去形を用いているのは，動詞 trat の過去形をそのまま訳したものであろう。3訳のどれもが全体として直接話法型であるのが注目される。

⑨　Er war allein, allein!　[HA 85]

A：彼は獨りだった，獨りだった！　[p. 167-168]

C：ひとり，ただひとりきりだった。　[p. 224]

D：ひとりぼっち，ただのひとりぼっちだった！　[p. 101]

K：自分はひとりぼっちだ，ひとりぼっちなのだ！

⑨は①と比較して考えるべきである。Cが，①では現在形の訳であったのに，⑨では過去形となっているが，その理由は明確でない。Kでは①と同じ解釈にした。

⑩　und jetzt so todt.　[HA 93]

A：ところが今は全く死んでゐる！　[p. 182]

C：それなのにいまはまるで死だ！　[p. 231]

D：それなのに，今はまるで死んでいる。 [p. 109]

3訳とも現在形を採用しているが，⑥と同形の体験話法であることを考慮に入れると，Dの訳には矛盾があることになる。⑥では過去形を採用しているからだ。

⑪ aber todt, todt! [HA 93]
A：……然し，死んでゐる！　死んでゐる！ [p. 182]
C：……しかし死んでいる。死んでいる。 [p. 231]
D：……しかし死んだも同然……死んだも同然だった！ [p. 109]

⑪は⑩とのイソトピー(注37)を考慮に入れたい。その点，Dは過去形を採用しているので⑩とは一致しない。

⑫ diese Züge, dieses stille Gesicht sollte verwesen [HA 93]
A：この顔つき，この静かな顔がやがては腐るのだ…… [p. 183]
C：この面もち，この静かな顔が腐ってゆくのだ…… [p. 231]
D：この顔，この静かな顔だちが腐っていかなければならないなんて！ [p. 109]

A，Cは「のだ」で，Dは感嘆文にすることで，レンツへの共感の強まった表現になっている。

⑬ er hatte keinen Haß, keine Liebe, keine Hoffnung, eine schreckliche Leere (und doch eine folternde Unruhe, sie auszufüllen.) Er hatte nichts. [HA 98]
A：彼には如何なる憎しみも，愛も希望もなくなった――恐ろしい空虚，しかもそれを充たそうとする苦しい不安，彼には何にもなかった。 [p. 192]

C：彼には憎しみも，愛も，希望もなかった――あるのは恐ろしい空虚，そして，それを満たそうとする苦しい不安。彼には何もなかった。
[p. 235]

D：[–] 憎悪も，愛も，希望もなかった。あるものはただ，おそろしい空虚と，その空虚をみたしたいという胸苦しいばかりの焦慮だった。彼には何もなかった。 [p. 113]

K：[–] 憎しみも愛も希望もない。あるのは恐ろしい空虚と，それを埋めようとさいなむ焦りばかりだ。[–] 何もないのだ。

A，Cは三人称過去形の地の文としての訳になっている。Dはゼロ代名詞だが過去形，しかも最後の文は「彼」を用いて語り手のパースペクティブによって客観化されてしまっている。Kではゼロ代名詞，現在形にまとめてみた。

⑭ die Natur, Menschen, (nur Oberlin ausgenommen,) Alles traumartig, kalt [HA 98]

A：自然も人間も，オーベルリーンだけを除いて，すべては幻のやうで，冷たかった。 [p. 193]

C：自然も，人間も。ただオーベルリーンだけは除いて――。すべては夢のようで，冷たい。 [p. 236]

D：しかし自然も，人間も，ただオーバーリーンだけを除いて――なにもかもが夢のようで，冷たかった。 [p. 114]

K：自然も，人間も，オーベルリーン以外はみな夢のようで，冷たい。

Cだけが現在形を用いているのが注目される上に，die Natur, Menschen, nur Oberlin ausgenommen を体験話法の直前の文につなげて解釈している。Cにかぎり，直前の部分も訳を紹介してみる。

C：彼は完全に錯乱した。そのとき彼は自分のまわりにあるすべてのものを，自分の思い通りにあつかおうとする限りない衝動に駆られた――自然も，

人間も。――　　[p. 236]

Cでは，⑭の前半部 die Natur, Menschen, nur Oberlin ausgenommen を地の文とのつなぎとして中間的に訳し，Alles traumartig, kalt だけはレンツの内面描写の体験話法として直接話法型に訳しているのである。A，Dでは地の文との区別はない。Kでは，die Natur, Menschen の部分から内面描写として後につなげて解釈し，直接話法型に訳した。

まとめ

以上で『レンツ』の体験話法の日本語訳についての考察を終わるが，全体として言えることは，『レンツ』の場合，ゼロ代名詞またはロゴフォリック「自分」と，現在形の文末を基本とし，適宜感嘆表現などを活用することで，体験話法の部分テキストの日本語訳がレンツの内面描写であることを示し易くなるのではないかと思う。ゼロ代名詞と「自分」によって純粋な直接話法からはやや遠ざかるものの，基本は直接話法型であると言ってもよい。ただ，レンツの無意識を表現するところは語り手寄りとなり，直接話法型にはなりえない。

またこのテキストの語り全体がレンツのパースペクティブに傾いたペルゾナールな語りが多く，手塚訳などでは体験話法の訳以外でも「彼」がかなり減らされている。そういう中では，体験話法部分は，直接話法に限りなく近づきつつも，一人称の主語を避け，自由間接話法よりは主人公から離れた訳を，探っていくことが望まれる。

〔注〕

(1) Anderegg (1970), S. 21-34./ Pascal (1977), S. 60-66./ Pascal (1978), S. 68-83. Stanzel (1979) など。

(2) Vgl. Stanzel (1979).

(3) ・保坂 (1977), p. 175 および p. 186 参照。
・中川氏は，英語の話法研究を中心に据えておられるため，「自由間接話法」の用語

を使っておられるが，中川（1983）p. 7 ではフランス語（le style indirect libre = 自由間接体），ドイツ語（erlebte Rede = 体験話法），英語（free indirect speech または represented speech = 自由間接話法）の紹介がある。

・牧野（1989再版），p. 205-209 参照。

・Roncador (1988), S. 243-295 参照。牧野（1989）の用語では，ロゴフォリックを「再帰代名詞」と呼んでいる。(p. 205-209)

（4） Hrsg. von Gutzkow, Karl: Telegraph für Deutschland. 1839. 文献E.

（5） Hrsg. von Büchner, Ludwig: Nachgelassene Schriften (1850). 本論の筆者はこの版は直接参照できていない。Herrmann (1966) によった。

（6） Herrmann (1966), S. 253.

（7） 文献F，G.

（8） 文献Eに同じ。

（9） 文献A.

(10) Vgl. Gersch (1984), S. 58-77. und Dedner (1995), GBJb 8. S. 3-68.

(11) Steinberg (1971), S. 27f.

(12) レーマン版はHAを略語とする習いである。以下HAを用いる。

(13) 体験話法の定義や認定基準については保坂（1977）や Steinberg (1971) など参照。筆者の詳細な考察については，ERBL（文献20）参照。

(14) Vgl. Pascal (1977).

(15) Vgl. Anderegg (1970), Pascal (1977).

(16) Vgl. Stanzel (1979).

(17) Pascal (1977, 1978) はこの部分にも体験話法があると主張したが，筆者は賛成できない。詳細については ERBL 及び未発表拙論（修士論文）参照。

(18) Vgl. Stanzel (1979).

(19) この構文はゲーテの『若きウェルテルの悩み』の5月10日付けウェルテルの手紙に酷似している。Hasubek (1969) など多くの研究者がビューヒナーの『レンツ』とシュトルム・ウント・ドラング期の言語の類似性について指摘してきた。文献 6. S. 41f.

(20) 文献15. 本論 p. 12 に引用。

(21) Stanzel (1979) の用語 Personalisierung. 前田訳（1996）では「作中人物化」と訳している。

(22) Kohärenz. テクスト言語学の用語。de Beaugrande 他（1981）= 文献 4, S. 88-117.

(23) 保坂 (1977), p. 175, p. 186.

(24) 中川 (1983), p. 201f.

(25) Ebd. p. 212.

(26) Ebd. p. 212.
(27) Ebd. p. 214.
(28) Ebd. p. 216.
(29) Ebd. p. 237の注18参照。
(30) Ebd. p. 234.
(31) Ebd. p. 234.
(32) 保坂／鈴木 (1993), p. 34.
(33) 牧野 (1989再版), p. 205-209.
(34) Roncador (1988), S. 243-295.
(35) 牧野 (1989), p. 205-209.
(36) 保坂／鈴木 (1993), p. 34.
(37) Isotopie. テクスト言語学の用語. Kallmeyer 他 (1974) = 文献 8, S. 143-161.

参考文献

＊紙数の都合により参考文献は本稿に直接関連するものだけ挙げる。

テクスト

使用テクスト

A. Büchner, Georg: Lenz. Sämtliche Werke und Briefe. Historish-kritische Ausgabe mit Kommentar. Hrsg.v.Werner. R. Lehmann. Bd. 1. München: Hanser, 1974. S. 79-101.

参照テクスト

B. Büchner, Georg: Lenz. In: Dichtungen. Leipzig: Reclam, 1971. S.85-108. (底本は「ベルゲマン版」と考えられる。

C. Büchner, Georg: Lenz. In: Dichtungen. In: Werke und Briefe. Wiesbaden: Insel, 1958. S. 85-111.

D. Büchner, Georg: Lenz. erläutert von Mitsuo Iiyoshi. Tôkyô: Asahi, 1994.

E. Büchner, Georg: Lenz. In: Telegraph für Deutschland. 1839. Jan. Nr.5, 7, 8, 9, 11, 13, 14. CIP-Kurztitelaufnahme der Deutschen Bibliothek: Georg Büchner. Gesammelte Werke. Bd. 8. Lenz: die Relieque; (1839)/(Hrsg. v. Karl Gutzkow)—1987 Erstdruck und Erstausgaben in Faksimiles. Hrsg. v. T. M. Mayer. Frankfurt a. M.: Athenäum, 1987.

F. Büchner, Georg: Lenz. Studienausgabe. Hrsg. v. Gersch, Hubert.

Stuttgart :Philipp Reclam. 1984.

G. Büchner, Georg: Lenz. Text und Kommentar. Hrsg. v. Dedner, Burghard. Frankfurt a. M. : Suhrkamp. 1998.

日本語訳

a. 青木重孝訳：『レンツ短篇』「ゲオルク・ビューヒネル作品集　ダントンの死外四篇」東京：白水社. 1941. p. 155-198.

b. 手塚富雄訳：『狂ってゆくレンツ』「世界短編文学全集 3 ドイツ文学19世紀」手塚富雄編　東京：集英社. 1963.

c. 手塚富雄訳：『狂ってゆくレンツ』「ゲオルク・ビューヒナー全集全一巻」手塚富雄・千田是也・岩淵達治監修　東京：河出書房新社. 1970. p. 219-243. (1963年版の改訳)

d. 手塚富雄訳：『狂ってゆくレンツ』「現代の世界文学　ドイツ短編24」東京：集英社. 1971. p. 48-70. (1963年版の再録)

e. 飯吉光夫訳：『レンツ』「中央公論文芸特集 1990年秋季号」東京：中央公論社. 1990. p.96-116.

参考文献

1. Oberlins Aufzeichnungen und Georg Büchners „Lenz" in Gegenüberstellung. In: Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe mit Kommentar. Bd. 1. Hrsg. v. Werner. R. Lehmann. München: Hanser, 1974. S. 436-483.

2. von Goethe, Johan Wolfgang: Die Leiden des jungen Werthers. In: Johan Wolfgang Goethe Werke in sechs Bänden. Bd. 4. Frankfurt a. M.: Insel, 1993. S. 7-112.

3. Anderegg, Johannes: Leseübungen. Kritischer Umgang mit Texten des 18. bis 20. Jahrhunderts. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1970.

4. de Beaugrande, Robert-Alain / Dressler, Wolfgang Ulrich: Einführung in die Textlinguistik. Tübingen: Niemeyer, 1981.

5. Dedner, Burghard: Büchners *Lenz*: Rekonstruktion der Textgenese. GBJb (Georg Büchner Jahrbuch) Nr. 8 (1995), S. 3-68.

6. Hasubek, Peter: „Ruhe" und „Bewegung". Versuch einer Stilanalyse von Georg Büchners „Lenz". In: GRM 19 (1969), S. 33-59.

7. Herrmann, H. P.: „Den 20. Jänner ging Lenz durchs Gebirg". Zur Textgestalt von Georg Büchners nachgelassener Erzählung. Zfdph. (Zeitschrift

für deutsche Philologie) 85 (1966), S. 251-267.

8. Kallmeyer, Klein, Meyer-Hermann, Netzer, Siebert: Lektürekolleg zur Textlinguistik. Bd. 1. Einführung. Frankfurt a. M.: Fischer Athenäum, 1974.

9. Pascal, Roy: The Dual Voice. Oxford: Manchester University Press, 1977.

10. Pascal, Roy: Büchner's Lenz— Style and Message. In: Oxford German Studies. Bd. 9. Oxford, 1978. S. 68-83.

11. von Roncador, Manfred : Zwischen direkter und indirekter Rede. Nichtwörtliche direkte Rede, erlebte Rede, logophorische Konstruktionen und Verwandtes. Tübingen: Niemeyer, 1988.

12. Stanzel, Franz K.: Theorie des Erzählens. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1991. 初版は1979. 従って略記は Stanzel (1979) とする。

13. Steinberg, Günter: Erlebte Rede. Ihre Eigenart und ihre verschidene Formen in neuerer deutscher, französischer und englischer Erzählliteratur. Göppingen: Alfred Kümmerle, 1971.

14. 中川ゆきこ：自由間接話法. 京都. あぽろん社. 1983.

15. 保坂宗重：テキスト理論による文章の分析——日本語の体験話法について——.「日本語と文化・社会5『ことばと情報』」所収. 東京. 三省堂. 1977. p. 161-196.

16. 保坂宗重, 鈴木康志：体験話法（自由間接話法）文献一覧 ——わが国における体験話法研究———水戸. 茨城大学教養部, 1993.

17. 牧野成一：くりかえしの文法——日・英語比較対照——東京. 大修館書店, 1989. (1980 初版)

18. シュタンツェル, F, K／ 前田彰一訳: 物語の構造——「語り」の理論とテクスト分析———東京. 岩波書店. 1989.

20. Kanda, Kazue: Die Erlebte Rede in Georg Büchners „Lenz". 『ドイツ文学研究』29号所収. 1997. 名古屋. 日本独文学会東海支部.

（かんだ　かずえ　　ドイツ文学）